

『類題八雲集』について

芦 田 耕 一

(鳥根大学法文学部)

摘 要

『類題八雲集』をあらゆる観点から論じたものである。(1) 諸本間において、「鶴山中蔵板書目」の書名に違いがあり、または見返しの記載に有り無しが存在する。(2) 編者や成立にはさしたる問題はないが、歌数が一三二〇首、歌人が三四四名は、ある地方だけの歌人の歌を収めたものとしては他に知られるものはなく、大部な歌集である。歌の取材源は明確ではないが、各地で催行された歌会や鶴山中、亀山中という歌壇結社での歌会から採用された可能性がある。(3) 本集は「鶴山中蔵板」とあり、地方版、私家版である。この「蔵板」で他に何点か上板している。(4) 印刷部数や上板までの日数や費用については、一般的な事例を挙げたが、必ずしも明確ではない。本集は知られる限り三種類あるが、増刷されたのである。(5) 地方版、私家版であるので、三都や名古屋等の拠点となる本屋が売り捌き所となっている。かなりの需要のあったことが分かる。(6) 名所を詠んだ歌が多く見られ、有名なものから珍しい名所まであり、これも歌会で詠まれた可能性がある。

キーワード：出雲歌壇、類題和歌集、地方版(私家版)、歌壇結社

一

まず、『類題八雲集』の書誌的説明からはじめよう。

板本で、縦一八・〇センチ、横一二・〇センチ。縦約一七・〇センチ、横約一二・〇センチのいわゆる小本とほぼ同じ大きさである。一冊本。

鼠色の表紙で布目地。角布あり。外題は左肩に題簽で「類題八雲集 全」とある。次に見返しであるが、ここに「出雲国杵築／類題八雲集／鶴山

社中蔵板」という事項が記載されているが(図1)(架蔵本、鳥根大学附属図書館桑原文庫本、鳥取県立図書館本)、まったく記載されていない本も見受けられる(手銭家本、石川県立図書館李花亭文庫本)。次いで千種有功の序文が一丁ある。本文は六九丁。そのあと、「鶴山中蔵板書目」として半丁あり、「類題杵舎集 一冊 既刻／類題八雲集二編 一冊 近刻／類題鶴山集 一冊 同／比奈能歌語 一冊 既刻／同二編三編 各一冊 近刻／言語躰用論 嗣出」と挙がる(図2)。これは、

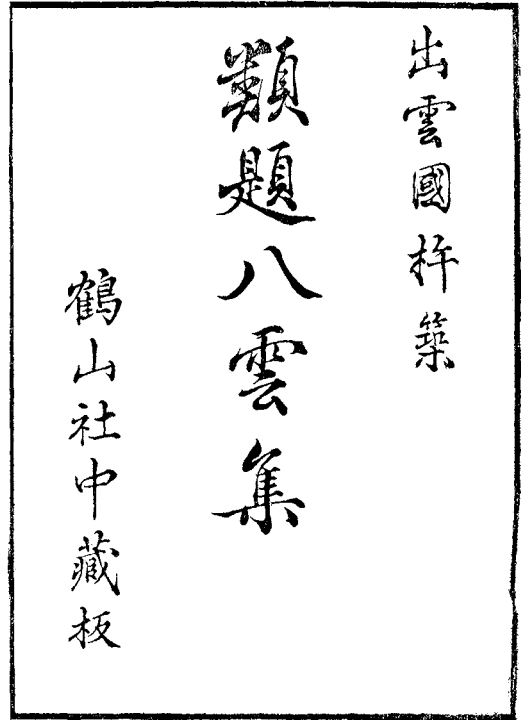


図1

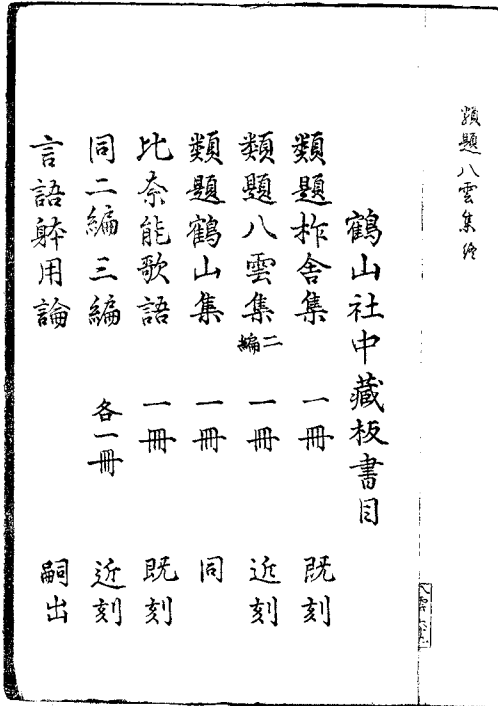


図2

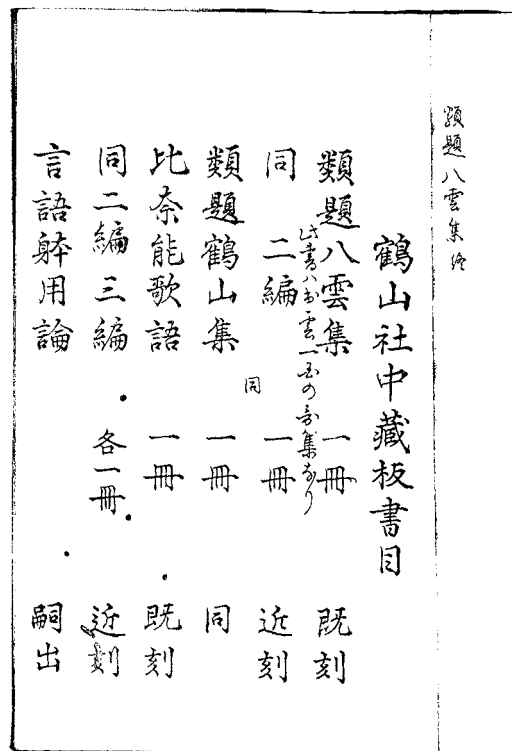


図3

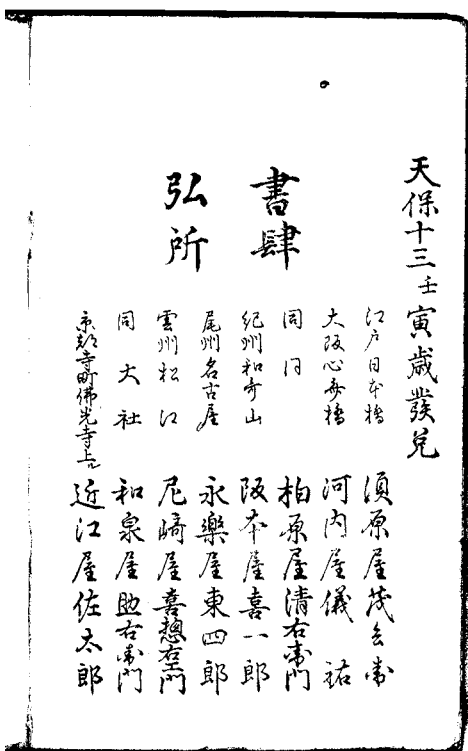


図4

架蔵本、桑原文庫本、鳥取県立図書館本、李花亭文庫本に見られるのであるが、手銭家本は「類題八雲集 一冊 既刻／此書は出雲一国の歌集なり／同二編 一冊 近刻／同」と初めにあり、『類題鶴山集』以下は他の四本とまったく同じように挙がっている(図3)。つまりこれは『類題柞舎集』の代わりに本集の説明をしているのである。これらの違いは見返しの記載の有無とも絡んで、複雑な問題をはらんでいるが、後述しよう。最後は別丁として半丁分の奥付があり、「天保十三壬寅歳発兌」と上板年時を示し、さらに「書肆弘所」として八書肆を挙げるが(図4)、このこともあとで詳細に説明しよう。

二

ここでは、本集の編者や成立等について取り上げる。
編者については、千種有功の序文に次のように見えることで判明する。
編纂意図も述べられているので少し長く引用してみよう。

大八島の国々おほかれど、出雲のくには神代のふるごと、国の古事さはなる国にて、かのやくもたつの御歌は三十もじあまりひともしのみなもと、なりて、ことの葉の道にはわきてゆゑよしふかき国なりけり、しかはあれど、うち日さす都にとほきくになれば、国人のよみとよみ出るうたどもの中には、千酌の浜の貝や玉やとひろひてもてはやすべきもあべかめるを、おほく人にもしられず大野の猪のあとうせなむことをあたらしみて、行水のはやくより思ひおこして河ふねのもそろ／＼に心のひきのまに／＼かきあつめつ、八雲集と名づけて歌巻とせられたるは、大社につかへまつらる、尊孫宿禰の此道に心ざしあつきによりてなるべし(後略)

『類題八雲集』について(若田耕一)

和歌発祥の地であるにもかかわらず、都から離れているので出雲国人の詠んだ歌が散逸してしまう恐れがあり、これを懸念して「尊孫宿禰」が収集した歌集だという。周知のごとく、出雲はスサノオノミコトの「八雲立つ出雲八重垣つまごめに八重垣つくるその八重垣を」の神詠により『古今集』序で和歌発祥の地であると揚言されている。編者の「尊孫宿禰」は出雲大社の七八代国造千家尊孫(一七九六―一八七三年)のこと。本集に尊孫詠が入集していないが、編者のゆえであろうか。尊孫は幕末の出雲歌壇の基礎を築いた千家俊信(一七六四―一八三一年)の高弟であり、国学はもちろんのこと、和歌においても一家を成した人物である。

なお、尊孫が序文を依頼した千種有功は著名な堂上歌人であり、中澤伸弘氏は、「二条流の歌学を習得したもののそれに飽き足らずに香川景樹、賀茂季鷹、橘千蔭と言った、京、江戸の歌人や、西田直養、大國隆正と言った国学者とも交はつた人物でや、特異な存在であつた。歌に関しては尊孫の思ひと重なるものがあつたのであらう」とし、「八雲集刊行の頃に尊孫らには有功の門に連つてゐたのである」と述べている。⁽¹⁾また、有功は尊孫の三男で天死した尊朝の『類題柞舎集』の跋文も記している。成立年時は、序文に「かくいふは天保十三年の五月ばかり 有功しるす」、奥付に「天保十三壬寅歳発兌」と見えるので、天保一三年(一八四二)五月ころである。

次に、歌集や歌人等に関わる諸問題を取り上げたい。

本集はその書名に示すとおり類題和歌集である。これは、たとえば「春部」に例を求めると、「柳に小鳥おほくかける絵に」「天保十年二月二十七日風調館(注、千家国造家の儀式用の建物で、現在の神楽殿のこと)の桜の宴に」のようないわば日常生活詠の歌が少しはあるが、基本

的には「立春霞」「江山春興多」「閑居子日」のように歌題を細分化して標題ごとに分類した歌集の謂いである。江戸時代において、与えられた歌題で詠むという題詠の形式で和歌を詠じることがほとんどなので、類題和歌集を手元において詠作することが普通であったかと思われ、また証歌や類歌の検索にも便利なことも相俟って、この類の歌集は盛んに作られたのである。

本集は、春・夏・秋・冬の四季部、恋部、雑部の典型的な六部立から構成されており、歌数は春は二七三首、夏一七一一首、秋二五六首、冬一六八首、恋一九八首、雑二五四首の計二三三〇首から成り立つ大部な歌集である。

歌人は三四四名の多きにのぼる。一首歌人もいれば、三〇首も入集する者と区々であるが、鶴山社中編『八雲集作者姓名録』（図5）（千家家蔵。千家和比古氏写真提供）や小滝空明氏「天保前後の出雲歌壇の人々―類

八雲集作者姓名録		鶴山社中編	
尊之	出雲省 ^{島根} 赤子 ^{子家}	前御杖代	
重光	千家上宦	島弾正	
之正	同上宦	千家兔毛	
隆剛	松江家士	奈倉一雨	
英正	大塚 ^郡 上野村 ^{神三}	勝部 ^純	
正蔭	千家 ^権 祐 ^直	中臣 ^亦	
網足	仁多 ^郡	佐々木 ^亦	

図5

題八雲集を中心として―」（島根新聞 昭和三八年一月二十九日）二月一日）によれば、若干の不明者はいるものすべて出雲国人である（なお、『八雲集作者姓名録』には入集歌はないもの出雲国人の四名を挙げている。あるいは入集させるつもりであったのかもしれない）。ただし、これらには生没年が見られず、また他資料からも不明な者もあり、現存の歌人か故人かの特定は困難である。

歌人の内訳は、おおよそ出雲大社の神官、出雲国の神社関係者、松江藩（支藩の広瀬藩と母里藩）の藩士、豪商・豪農等の四つに分けられる。ともあれ、序文に「国人のよみとよみ出るうたの中」、前述の「蔵板書目」に「此書は出雲一国の歌集なり」（手銭家本）と見られたとおりである。

本集のように、その地方だけの歌人の歌を収めたものとしては本集以前に三歌集が知られている。文政一三年（一八三〇）に近藤芳樹編の周防歌人の歌集『類題阿武の柚板』が上板されるが、歌数は八五〇首、歌人は一七六名である。天保五年（一八三四）の山本春樹編の大坂歌人の歌集『類題和歌（和歌類題）浪花集』は歌数は九六五首、歌人は二三名。天保一一年（一八四〇）の中島広足編の長崎歌人の歌集『瓊浦集』は歌数は六八一首、歌人は一〇六名。これらと比較すれば、本集がいかに歌数、歌人ともに群を抜いて多いかが分かり、出雲歌壇の層の厚さを窺い知るに十分である。

では、これだけ多くの歌を何から取材、収集し、編纂したのであろうか。資料的な制約もあり、不明なことが多い。

序文に「行水のはやくより思ひおこして河ふねのもそろく心に心のひきのまに／＼かきあつめ」と記されているが、具体的にはどう「かきあつめ」なのか説明されていない。たとえば、「諸君子のよみ出給はん玉

詠、書林へおくり給はらば、次々編輯すべし」(『出雲国名所歌集 初編』)や「此国の名所をよみ出給はん玉詠且御見聞の歌にても国所御姓名を御印被成、左之書林へ送り被下候はゞ、相達し次々編集出来のうへ上梓仕候」(『出雲国名所歌集 二編』)は全国にむけての告知であるが、本集のように出雲国内にせよ、このような募集があったに違いない(なお、歌稿のあて先が出版書肆であったことは当時では普通のこと)。これに類するような、歌人たちからの自詠や親族からの遺詠の自主的な提供があったことも当然考えられる。編者自らの諸歌集からの収集もあったであろう。

大事な取材源となつたであろう出雲国内での歌会を、本集と直接の関係はたとえ見出せないにしても例を挙げてみよう。

いずれも本集よりも後の成立であるが、本集の編者尊孫には歌集『類題真璞集』と自ら合点を加えた『自点真璞集』(『類題真璞集』との重複歌がある)がある。前者は安政二年(一八五五)上板、後者は尊孫の序文によると「時は慶応元年(注、一八六五)長月ばかり」のころの成立となる。いずれにも歌会催行のことが散見される。

前者に、

- ・天保三年(注、一八三二)伊勢大神へ代参に田辺元修出た、せける日人々来りて題を探りて歌よみけるに
- ・ある人来りて題をさぐりて歌よみけるに旅宿基といふを得て

という探題での歌会が見られる。歌はともに尊孫詠しか挙げられていない。「田辺元修」は生没年未詳、出雲国神門郡大津在で医師である。「旅宿基」という歌題は本集にはなく、これに類するものには「旅宿」「旅宿夢」

『類題八雲集』について(若田耕一)

「旅宿風」などがある。

後者には、

- ・元治二年(注、一八六五)の春題をさぐりて歌よみけるに流水清といふを得たりけるに
- ・両社中の男どもつどひて山松といふ題をよみける日
- ・別火千秋財吉満人々をつどへて多加良といふことをよませける日つかはしける
- ・坪内忠臣が家に人々集て同題(注、忠臣)をよみける日つかはしける

のような歌会が見られる。歌はいずれも尊孫詠しか挙げられていない。おのおの簡単に説明を加えよう。「流水清」は本集にはない歌題である。「両社中」はその歌「鶴かめと名をわく山も松風の千代よぶ声はへだてざりけり」から「鶴山社中」「亀山社中」と考えられる。そもそも「社中」とは地域を中心とした同門の集まりのこと。千家国造館の裏山「鶴山」と北島国造館の裏山「亀山」に因む命名である。「鶴山社中」は前出のように本集の蔵板主であり、歌人結社とらしい。天保年間(一八三〇～四四年)の初めころに結ばれ、明治時代(一八六八～)の初めまで活動していたとされている。^②「亀山社中」は今までまったく存在すら知られていなかったもので、これは貴重な資料である。「山松」は本集にはない。別火千秋財吉満」は別火吉満のこと。生没年未詳、出雲大社上官で歌人としても著名である。歌題の「多加良」は、その歌「姓の名のたからをまたつみな、む千秋長秋ながくとしへて」が「千秋財吉満」という縁起の良い名を問題にしていることから「室」のことであろう。最後に「坪

内忠臣」は生没年未詳、大社教中講義で尊孫を師とする。歌人としても著名である。歌題の「忠臣」は本集にはない。

このようにみれば、各地で歌会があったことは、十分に想像されることとであり、特に鶴山社中、亀山社中の歌会には多くの人々が参加し、研鑽を積んだことであろう。

では、さまざまな方法で収集された歌はどのように処理されたのだろうか。まず選歌する必要がある。題詠が当時の一般的な詠み方であったにしても、標題が付されていない歌も多くあったに違いない。付されていても編者の意向に相応しいように変更されることもあったであろうし、付されていない歌には標題を考える必要がある。この後、一三二〇首をしかるべき箇所配列する。これらのことにかかりの時間と労力を要することは想像に難くない。編者一人ではたして可能な作業であっただろうか。『自点真璞集』序に尊孫自ら、

この歌はおのれ年来よみおける歌の中より一わたり聞えたるさまなるを、社中の男どもにえり出させたるなり。それがなかにみづから
もいさ、かよしとおもへるにつまじるしをつけ、るになむ

と記している。「社中」は鶴山社中であるが、かれらの選歌などの助力があったという。本集も同様であったかも知れないが、あるいは尊孫が監督者で、実質的には「社中」のメンバーの協同作業の可能性も大いにあるであろう。こういうこともあり、編者名を明記しなかったのではないだろうか。

三

ここでは「鶴山社中」に関わり、出版のことを取り上げよう。

本集は見返しに「鶴山社中蔵板」とある。これは鶴山社中が板木の持主、即ち版權者であることを示す。『日本古典籍書誌学辞典』の「出版物」項には「いわゆる三都および名古屋以外の地方で刊行された出版物をいう。中村幸彦の定義によれば（中略）「地方版を判別する条件として、前掲した諸条件（注、「資本主・出版元・彫刻（植字）・印刷・製本・販売（配布）」のこと）の一つでも、地方に関するものがあるもの」（中野三敏氏担当）と見える。本集は鶴山社中が版權者であるので、「資本主」であり（「出版元」でもある）、地方版ということになる。また、営利目的で本屋が出版する書物ではないので私家版でもある。この場合、彫刻・印刷・製本など製作の実務は江戸、大坂、京都の三都や名古屋の専門家に委ねられることがほとんどと思われるので、本集もそのようであったらう（後述）。

ここで、「鶴山社中蔵板」として出版された書物を時代順に紹介しよう。

- ・『比那能歌語』 尊孫著 天保九年（一八三八）
- ・『類題柞舎集』 尊孫編（尊朝遺歌集） 天保一三年
- ・『類題真璞集』 尊孫著 安政二年（一八五五）
- ・『自点真璞集』 尊孫著 慶応元年（一八六五）

『類題真璞集』は「鶴山社中蔵版」ではなく「鶴山文庫」と見える（図6）が、『比那能歌語』には「鶴山社中文庫」とあり（図7）（桑原文庫蔵）、これと同じであろう。

その他に『自点真璞集』の「鶴山社中蔵板書目」に「歌神考 一冊 近刻」と挙げられているが（図8）、『歌神考』は尊孫男の尊澄（号は「松



図7

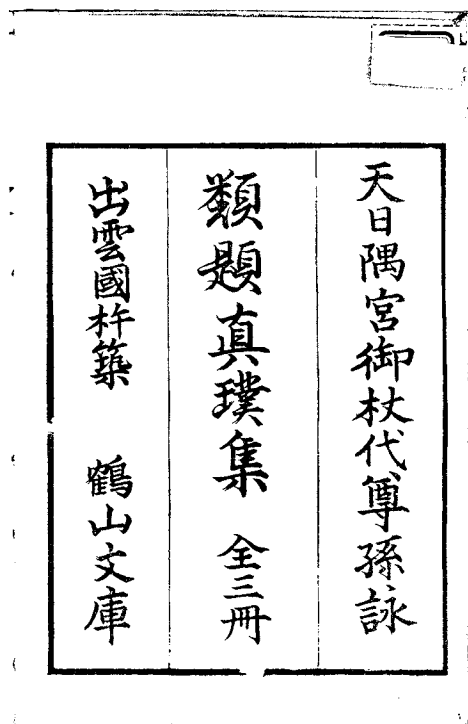


図6

鶴山社中蔵板書目	
一 類題八雲集	一冊 既刻
一同 杵舎集	一冊 同
一同 真璞集	三冊 同
一同 比奈歌語	一冊 同
一 自點真璞集	四季二冊 同
一 歌神考	一冊 近刻
一 神壽詞後々釋	二冊 同
一 懷橘談辨論	一冊 同

図8

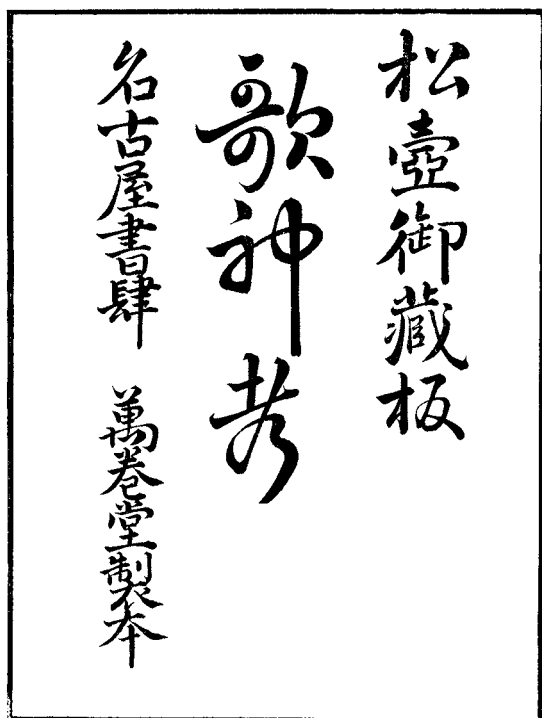


図9

壺」の著で文久二年（一八六二）以降に上板された。しかし、実際は「松壺御藏板」とある（図9）。

なお、本集の「鶴山社中蔵板書目」に見えながら、上板されなかったものに『類題鶴山集』『類題八雲集 二編』『比那能歌語 二編（三編）』『言語躰用論』があるが、『類題鶴山集』は編纂中であつたらしく、稿本の一部が千家家に存するという³⁾。

出雲国に「鶴山社中」「亀山社中」という歌人結社が成立したように、特に天保期以降になると全国各地に歌壇が結成されて、結社名で多くの歌集を上板することになる。

ここでいくつかの歌集とその蔵板者名（奥付等のまますまを挙げる）を著

名なものも含めていくつか紹介しよう。

- ・『類題阿武の柚板』「今宮文庫蔵梓」（前出。周防国人の歌集。萩の結社であるが、詳細は不明）
- ・『類題春草集 初編』「葎屋社中蔵板」（「葎屋」は豊後国の物集高世の号）
- ・『瓊浦集』「社中蔵」（前出。肥前国人の歌集。編者中島広足の「檀園社中」のことか）
- ・『類題武蔵野集 二編』「蓬園社中蔵板」（「蓬園」は江戸の仲田頭忠の号）
- ・『類題鯁玉集』・『鯁玉集作者姓名録』「柿園社中蔵板」（「柿園」は紀伊国の加納諸平の号）
- ・『類題和歌鴨川集』「絡石舎社中蔵板」（「絡石舎」は紀伊国の長沢伴雄の号）
- ・『名所今歌集』「鈴屋門人 尾張社中」（尾張国の本居宣長の門人）

最後に、「鶴山社中」以外の出雲国の蔵板者と書名（歌集ではないが）を挙げよう。

- ・『松壺御藏板』（「松壺」は尊澄の号）『歌神考』
- ・『梅之舎蔵板』（「梅之舎」は千家俊信の号）『訂正出雲風土記』

四

本集の出版事情はどうであったのだろうか。

まず、本集はいわゆる地方版であるが、はたしてどれだけ刷られ、ど

れほどの日数や費用を要したのか、その費用はどうしたのかなどがまず問題になってくる。

印刷部数について、橋口侯之介氏は「江戸時代の版本は、一点についてどのくらいの部数が出たのかという疑問には、なかなか答えられない。一度に刷る部数は、数十から数百部程度と小刻みだが、長い期間を通じて何度も増刷、権利の売買をしたので、合わせてどのくらいの部数に到達するのか容易に勘定ができないからだ」と説明する^④。これは「権利の売買」とあるので、本屋の出す本、いわゆる「町版」を例にとつての謂いであるが、地方版ともなるとましてや全く不明と言わざるをえない。

上板までに日数はどれだけかかるのか。橋口氏は、本居宣長の著『国号考』を例にして述べている。紙数は五〇丁、板下を京都の本屋に三月八日に渡し、二校を終えて見本刷りができたのが一〇月三〇日であり、完成まで約七ヶ月かかったという。本集は約七〇丁であるので、大きさを考慮せずにいえば、単純計算で約一〇ヶ月近く要することになる。

費用はどれくらいなのか。橋口氏は、一八世紀後半を想定し、四〇丁ほどの一冊本を例にとる。「三百部をめどに私家版で出すなら、仲間への歩銀（注、手数料のこと）などの諸費用はいらぬが、職人への代金や紙代が本屋より割高になるので、七百匁は用意しなければならぬだろう。金貨なら十二両近く、現代感覚で二百二十万円に相当する」と説明する。本集はここにいう私家版といえるので、三九〇万円近く入用となる^⑤。

売値はいかほどか。橋口氏は「江戸時代を通じての和本の平均価格は、一冊当り五千七、八百円」と述べており、かなりの高額である。

では、これだけの費用を本集でどのように調達したのであろうか。鶴山中にある程度の資金力もあったかと思われるが、それ以上に投

『類題八雲集』について（若田耕一）

歌料によるところが大きいであろう。たとえば、慶応四年（一八六八）上板の佐佐木弘綱編『類題千船集 三編下』の「千船集三編作者姓名」のあとに、

四編料五編料の歌あまたつどひ侍れば引つゞきえらび侍るべし。よもの風流士たちとく御詠料をめぐみ給ひてよ。 東海道石薬師驛那木園塾 坂倉有周 藺田守英

と見え、会計責任者であろうか、投歌料の早期納入を切実に訴えている。また、久保田啓一氏は『明治開化和歌集』に因んで、「この種の撰集（注、類題歌集のこと）は、出詠者から何がしの金員を求めることが常であり、それでも巻末の姓名録に名が載ることへの満足も含めて入集を希望する人はあとを絶たない」と指摘しており、「作者姓名録」といういわば付加価値の意義を明らかにしている。確かに類題歌集には「作者姓名録」が付

出雲國名所歌集二編作者姓名	
フ 文清 佐草	ハ 伴雄 長澤衛門 環護 佐々木 朴次郎
井 芳章 吉田立人 芳久 富永	井 惟孝 土肥威兵衛 惟恒 西田内藏
セ 清年 田村安藝久 千蔭 加藤又左衛門	正 元 藤江波尾 正樹 外山 觀平
正 方 新居因幡 宣啓 諏訪阿波守	

図10

花迪下枝作者姓名録	
尊孫宿禰	國達千家御殿 天台宮御杖代君
公信	祐宜 西村右膳
言林	上管光章男 中式部
之正	上宦 千家山城
忠臣	祐宜昌成男 坪内好見
光章	上宦 中彦之進
栄子君	千家俊栄君御内室

図11

されることが多くあり、たとえば出雲国の歌集では、嘉永六年（一八五三）上梓の富永芳久編の『出雲国名所歌集 二編』（図10）（桑原文庫蔵）や安政四年（一八五七）の尊澄編とされる『はなのしづ枝』（図11）（手銭家蔵）にも見られる。前者については、全国からの募集であり、その意味するところは明らかであるが、後者については、作者はすべて出雲大社関係者で占められており、付すことにやや不審も感じられる。以上のことから、本集には「作者姓名録」が付されていて当然であるように思える。前述のように鶴山中編『八雲集作者姓名録』が手書きのまままで残されているのも、何らかの形で「本体に付すか、別冊にするか」―上板する企図があったのではないかと推測される。

次に、前述した諸本の見返しの記載の有無、「蔵板書目」の違いを取

り上げて、これらの諸問題と関わらせよう。改めて、これに従って諸本を三分類する。

- ・見返しの記載有り 「蔵板書目」の最初に「類題柞舎集」が挙がる。
↓架蔵本、桑原文庫本、鳥取県立図書館本
- ・見返しの記載無し 「蔵板書目」の最初に「類題柞舎集」が挙がる。
↓李花亭文庫本
- ・見返しの記載無し 「蔵板書目」の最初に「類題八雲集」が挙がる。
↓手銭家本

まず確認したい一つ目は、はじめの二例の「蔵板書目」は『類題柞舎集』の「蔵板書目」と全く同じであること。さらに本集の奥付と『類題柞舎集』の奥付が全く同じであることを言い添えたい（李花亭文庫の『類題柞舎集』には「蔵板書目」と奥付がない）。『類題柞舎集』は、千種有功の跋文の年紀が「天保十三年五月ばかり」とあり（本集の序文と同じ年紀である）、「天保十三壬寅歳発兌」とする奥付であっても不審ではない。すなわち、同じ「蔵板書目」と奥付が両書に使用されているのである。これは一対のものとして上板する意図があったのではないかとまで思量される。

二つ目は手銭家本のように、本集の「蔵板書目」に本集を挙げ（これは『類題柞舎集』も同様である）、しかも「此書は出雲一国の歌集なり」の説明まで付していること。しかし、これはよく見られることであり、たとえば『類題真璞集』の「蔵板書目」（図12）に「類題真璞集 三冊 同（注、既刻）」、『自点真璞集』の「蔵板書目」（図8）に「自点真璞集 四季二冊 恋雜二冊 同（注、既刻）」と自明であるにも関わらず載せている。

以上、簡単に検討してきたが、この限りにおいておのおのの不審はな

鶴山社中藏板書目	
類題八雲集	一冊 既刻
同二編	一冊 副出
類題鶴山集	一冊 同
類題柞舎集	一冊 既刻
類題真璞集	三冊 同
同二編	副出

比奈能歌語	一冊 既刻
同二編三編	副出
言語躰用論	同
安政二年乙卯五月發兌	

図12

用し、一部の本にわざわざ見返し等に変更を加えることによるような意味があるのだろうか。上板後に、ある事情で変更を余儀なくされたというのであろうか。

合理的に解釈しようとすれば、増刷（あるいは後刷り）されたと考えべきであろう。しかも三刷まで版を重ねたということになるか（版木の摩滅が問題になるが）。ここで、本集の歌人が三四四名の多数にのぼったことに注意したい。遺族も含めてほとんどの人が投歌料を払い、本集を入手したというのが実情であろう。これ以外にも、出雲国人や他地方の歌人たちの購入希望があり、版を重ねていったということがあったのではないだろうか。

では、初刷りはどの本なのであろうか。一般的には、条件として一番きちつとした体裁をとっているもの、つまり本集では見返しに記載があることが大事ではないか。次に「蔵板書目」に違いがあるが、尊孫としては夭死した尊朝（天保二年没。二二歳）を追悼する気持ちがあり、『類題柞舎集』をぜひとも載せたいという切なる思いを持っていたのではないか。このように推測すれば、前述したように、本集と『類題柞舎集』が一对となり、尊孫としても懇願が叶うことになる。

五

奥付に「書肆弘所」として挙がる八店を説明しよう。

前述したように、本集は地方版、私家版であった。「弘所」は売り込め所のことであり、蔵板主と提携して書籍の流通の要となる玄人の本屋のことをいう。三都と名古屋、および和歌山の本屋の名が見られる。

これらのうち、世話役とされる「支配人」は、板本では最後に記される本屋とされるが、本集は「京都寺町佛光寺上ル 近江屋佐太郎」であ

い。では、なぜこのようなことが生じたのであろうか。板本固有の問題も絡んで複雑ではあるが。

同時刷りでの所為とは考えられないであろう。本体部分をそのまま使

【類題八雲集】について（菅田耕一）

る（後に、所在地が「京都寺町六角下ル」と変る）。この本屋が支配人であることに関わって、興味深い記事が見られる。鈴木重胤の『皇京日記』に、本集成立よりすこし後の弘化三年（一八四六）四月二十八日に次のような記事がある。

已時ばかり京に入る。（中略）近江屋佐太郎にて、島兵庫重胤に、始めて逢ふ。此人は、出雲国大社の上官にて、己とは親しく消息する人なるが、逢ふ事は今始めなり。彼はシゲツグ、予はシゲタネなれど、字は同じきからに、鈴木重胤、島重胤と、己に依て彼は名高く、彼に依て己が名高きもをかし。

鈴木重胤と島重胤の出会いの場面である。鈴木重胤（一八二二〜六三年）は淡路国津名郡生の国学者、江戸等に住む。後の安政五年（一八五八）六月に出雲大社に参詣している。島重胤（一八一二〜八三年）は重老男で、出雲大社上官。有名な歌人で本集に二四首入集。本集の上板から近江屋との親交が生まれたのかもしれないが、あるいはそれ以前からなんらかの関係があったゆえに支配人を引き受けたという可能性もある。鈴木に關することとして、天保一四年（一八四三）の鈴木編『近世名家歌集』に「莞弘書肆」として「京師 近江屋佐太郎」とある。「近江屋」は屋号は弘文堂で上板については知られる点数は多くないが、『類題真璞集』の「弘所」としても名が見えている。

他の本屋をみていこう。

「江戸日本橋 須原屋茂兵衛」は周知のごとく須原屋一統の総本家で、御用御書物師。千鐘堂。寛政末まで板行二七三点の多くを数える。

「大阪心齋橋 河内屋儀祐」は岡田氏。「河内屋儀助」とも。積玉堂。

壺井義知『紫式部日記傍注』『嘉永二十五家絶句』等を上板する。

「同 同 柏原屋清右衛門」は洪川氏。称觥堂。大阪心齋橋。寛文ころ（二六六一〜七三年）から明治初年ころまで活動した。洪川版『御伽草子』や都賀庭鐘の読本を上板するなど板行点数も多い。

「紀州和歌山 阪本屋喜一郎」は野田氏。世寿堂。「阪本屋大二郎」は弟。紀伊の西田惟恒が關係する『近世名所歌集 二編』『安政年々歌集』『文久元年七百首』『文久二年八百首』等を弟とともに上板している。和歌山の本屋で最大の出版数を誇り、板行約百数十点にも上る。そもそも紀伊は御三家の御膝元である。紀伊とは千家俊信が本居宣長の門人になって以降、宣長の養子大平が紀伊に移住してからさらに交流が深まっていた。富永芳久はたびたび遊学しており、ここに名を連ねているのも当然であろう。

「尾州名古屋 永楽屋東四郎」は片野氏。東璧堂。中京の代表的な本屋で、宣長モノを特に多く上板している。

「雲州松江 尼崎屋喜物右工門」は元園山書店の前身。松江大橋詰。地元の本屋として、『出雲国名所歌集 二編』の「発行書房」（他に一五店が名を連ねる）や『比那能歌語』の「弘所」（他に三店）に關わるほか、『近世名所歌集 初編』にも名が見られる。

「同 大社 和泉屋助右衛門」は内藤氏。出雲大社前の四ツ角の小間物屋（酒類の販売も）である。地元の本屋として、『出雲国名所歌集 初編』『書林』として他の四店と名を連ねる）『同 二編』『出雲国名所集』（奥付が必ずしも明確でなく、『出雲国名所歌集 二編』の奥付の左半分のみある）『類題真璞集』（「弘所」として他に二〇店）『比那能歌語』に關わるほか、『近世名所歌集 初編』にも名が見られる。

以上、各本屋を簡略に説明してきたが、いずれも当該地域のいわば拠

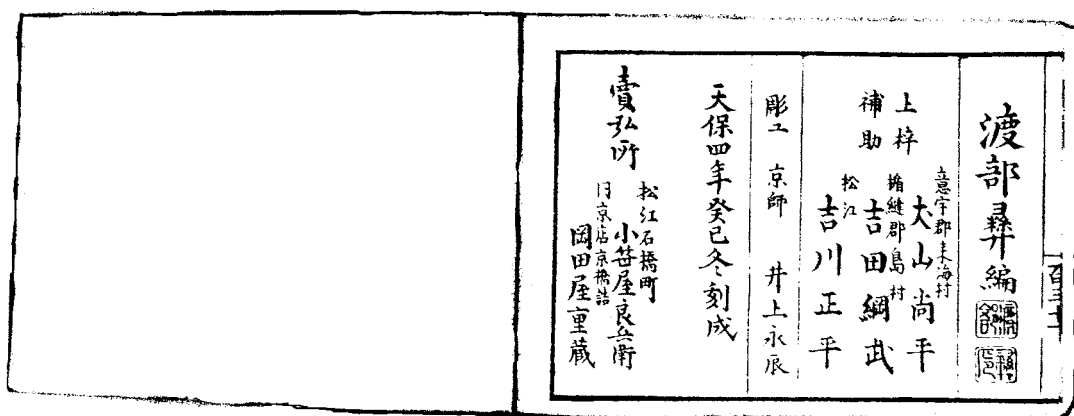


図13

点となる本屋であり、これらが売り捌き所になることは多くの需要が見込めたというのであろう。たとえば『出雲国名所歌集 二編』は「発行書房」として一六店が挙がり、北は東北地方の会津若松から南は熊本までの本屋が見られるが、これは歌人が各地域にわたっていたから当然のことであろう。本集は歌人は出雲国人だけなのであるが、この本屋の状況からすれば全国からそれだけ注目されていたと考えてよいのではないか。

ところで、地方版で私家版の本集ははたして上板まで出雲国で製作されたのであろうか。工程で高い技術を要する最も面倒な仕事は板木に彫ることとされており、この彫り師が地元に行ったのかなど興味のある事柄が多いが、全容は不明である。

一般的には、元原稿の清書

はたとえ地元でなされたとしても、彫ることまではどうであったらうか。たとえば地方版で私家版である『類題稻葉集』の奥付に「回水園蔵板 因幡鳥取 彫工 若桜屋利三郎 弘所書林 油屋仲蔵」とある。本書は鳥取藩士の中島宜門の歌集、「回水園」は宜門の号。嘉永五年（一八五二）ころの成立である。藩札の発行もあり、地元「彫工」がいたというのにも納得されることではある。また、主に出雲国や石見国の俳人の俳諧を取めた文政一〇年（一八二七）上板の俳書『波止能古江（鳩の声）』（島根大学法文学部国文学研究室蔵）に「彫工 赤名聴雁舎隴耕」とある。「赤名」は現在の鳥根県飯石郡飯南町にある。

しかし、次のような事例も見出される。天保四年（一八三三）に上板の渡辺舜編著の『出雲神社巡拝記』がある。「松江楓之舎蔵板」で奥付に「売弘所」として松江の二本屋が挙がっており（図13）（桑原文庫蔵）、典型的な地方版で私家版である。ところが、前例とは異なって「彫工 京師 井上永辰」と京都で彫られている。これが一般的ではないだろうか。本集も地元で彫られたのではなく、支配人の京都の近江屋佐太郎が関わった可能性が高いように思う。そして、当然のことながら、そのまま製本まで京都でなされたのであろう。

六

最後に、残されたいくつかの問題を取り上げよう。

本集と尊朝の歌集『類題杵舎集』の関係を述べてきたが、では両集の歌の出入りはどうなのであろうか。両集に共通する歌は二八首あり、本集独自の歌はない。尊朝詠は島重老（出雲大社上官）の三〇首、千家尊晴（尊孫弟）の二九首に次ぐ多さである。両集の歌題と表現を含めて比べてみると、少異はあるがほとんど同じである。念のため、まず同じも

のを歌題だけ列挙してみると、「紅梅」「早蕨」「春曙」「苗代」（以上、「春部」）、「菖蒲」「夏月」「夕立」「夏動物」（「夏部」）、「刈萱」「雨中草花」「八月十五夜」「鶉」「暮秋」（「秋部」）、「氷」「網代」「海辺雪」「寒月照梅花」（「冬部」）、「恋」「恋扇」「寄川恋」（「恋部」）、「雨」「浦」「冬旅」「船」「寄木祝」「寄民祝国」（「雑部」）と各部立に満遍なく配されていることが分かる。なお、『類題柞舎集』の部立は本集と全く同じである。

異なるものは二例だけである。「見わたせば川ぞひ柳風たえて霞のみ」となりける哉」（「春部」）の歌題が本集が「河上霞」に対して『類題柞舎集』は「河霞」であり、いま一例は「月前梅」の歌が本集では「鶯のなきやみぬれば梅の花月のものともなりにけるかな」（「春部」）が『類題柞舎集』では「鶯のねにける後は梅の花月のものとも成にけるかな」と二句目の表現が変わっている。前者の場合は単なる不注意の可能性もあるが、後者は尊孫が推敲した結果かと思われる。

両集のごく近い関係を窺い知ることができたが（ともに尊孫が編者であるので当然ではあるが）、先後関係については、どうであろうか。『類題柞舎集』は遺歌集であるので、故人の詠んだままで入集させるのが普通であろう。一方、本集には手を加えたものを入集させたというように推測すれば、上板の時期が同じであることもあり、先後は問題にならないだろう。尊孫は前々年の天保一年に没した息男を追悼する意図が強く働いたとやはり考えておきたい。

他に言及することも多くあるが、いま名所歌を取り上げよう。

本集にはおおよそ名所が二五一首詠み込まれており、総歌数のおおよそ二割を占める。嘉永四年（一八五二）の『近世名所歌集』の名所と九割方共通している。このうち出雲国の名所は八首存する。決して多くはないが、本集より後の嘉永四年上板の『出雲国名所歌集 初編』と翌々

年の『同 二編』との関係に絞って述べよう。編者はいずれも出雲大社の神官富永芳久である。

八首のうち、一首だけは入集していない。「山霞 佐草文清 雪きえぬ佐比売の山も霞けり出雲のうらの春の曙」（「春部」）であるが、『出雲国名所歌集 初編』には「佐比売山」が立項され（『二編』にはない）、三首あるにも関わらず、見出されない。

入集する七首はすべて『初編』に入る。ほとんど同じもの（「出雲森」「出雲潟」「枕木山」）は省略に従い、異なる四首を簡単にみていこう。

本集の「意宇郡大庭の宮の新嘗会によめる」（「冬部」）が『初編』の「大庭宮」項に「大庭宮の新嘗会に」とある。

同じく「睦月の頃松江に二十日計とまりて」（「雑部」）が「松江」項に「松江に有ける頃」とあり、歌についても「をゆび折て帰る日いと我妹子がまつ江の方を打や詠めん」の初句が「手ををりて」と異なる。「建御名方神の手末にさ、げ玉ひし千引の岩は出雲の浦の礫島なることを思ひて」（「雑部」）について、「出雲の浦の礫島」が「礫島」項に「今いなさの沖の礫島」と違って見られる。「出雲の浦」は現在の稲佐の浜一帯をいう。作者は芳久である。

「大社に詣て」（「雑部」）が「大社」項に詞書なしで入る。

以上から、『出雲国名所歌集』が本集に取材したことは明らかであり、その性格上、必要のないものは極力省略したり、より分かりやすいように書き変えたのであろう。

次に、出雲国以外の特徴のある名所をみていこう。

まず多いのは「都」に関わる歌であり、一九首見られる。たとえば「山家初春」の「ながめやる都の方は霞けり雪だに消よをの、山ざと」（「春部」）のように「都」だけを詠むのもあれば、「都雪」の「小夜更てゆき、

まれなる程計都大路の雪は積れり」(冬部)は「都大路」、「山家」の「都人宿はとはゞ白雲のかさなる山をさして答へん」(雑部)は「都人」等のようにさまざまなバリエーションがある。

「浪花」に関わる歌は一〇首あり、「都」と同様のことが窺える。「曙霞」の「梅が、もあわれをそへて霞けり浪花の春の明ぼの、そら」(春部)は「浪花」、「菖蒲」の「浪花がたあやめに交る芦のはは引残されてうら風ぞふく」(夏部)は「浪花渦」、「冬月」の「みわたせば汐風さむし芦がちる浪花入江の冬のよの月」(冬部)は「浪花入江」等のようである。

山城国の「末野」も五首と多く詠まれている。たとえば「里花」の「さくら花咲にけらしな二月の末野の里にほふはる風」(春部)、「夏虫」の「六月の末野の草にこもる蚊を蚊やらふ計夕風ぞふく」(夏部)、「虫」の「長月の末野の千種うら枯て哀ふりゆく鈴むしの声」(秋部)はいずれも「末野」が掛詞として機能していると思われ、このことが多くを詠ましめたのではないだろうか。

これらはポピュラーな名所であるが、『近世名所歌集』に見られない例をいくつか挙げよう。

「誓恋」の「我を置いてあだし心はいさら川さらく君がなしといふ哉」(恋部)の「いさら川」は平安時代の歌集にはわずかに見られるが、これ以降は詠まれていない。ところが、『類題真璞集』に「遠恋」として「妹がりの道の長手のいさら川いくよかこゝに駒休めけん」とあり、先後関係は不明ながら、この名所をいわば共有していることに注意したい。

「遠恋」の「我妹子に会津の里は遠くともかきだに絶な坪の碑」(恋部)の「会津の里」は平安時代の歌集に「みちのくの会津の里」としてわず

かに見られるだけであるが、『自点真璞集』に「互忍不逢」の「諸ともにしのおの山をかへりみて会津の里にいたりかねつ」、「名所占」の「いづこにもうらべはあれど恋うらは会津の里に行てとはゞや」と見られる。「寄木祝」の「大和なるかるの社はありときくいひつきせぬ君が御代哉」(雑部)の「かるの社」は見られない名所である。これは尊朝詠で、『類題杵舎集』にも入っている。

千竹園為茶ぬれ此千賀守寄出雲國名所祝とを念とを
 なるからむ君さまみだくらかかるとをらほしはしきみれ此
 むれきほくかめ田のじめてよくそよもきる流とまむれ
 出まふのかる船日は柳をのぼる深く千層ひうろをそえん
 よろけ代の流をわひれとをかえりよるをこそたのからけ
 かのうてゆくそるかみんゆるるねぞうまををうけの流
 ふ代ふき所公のとわれれはくから楢田の森のあしたつ
 天地とともにはも鬼をまを川はきぬや代のはれ)なるらん
 ふれ名のらんふぬたも地のをさうそふ代の色考むらほ
 敬さふはもきぬたのしやま我我川はまもまをたねははからん
 五十年此君かちとせの板の浦子きかまのひてふえぬまらか
 甘なふを真在井の清水ふひけてくむとをば君をそそ
 ふ代とかく西井の流の御早心ましくはもらせらうくそそ
 出あかた神所の浦よまはる君らんふ代をのけてよそたて
 冬代は志をなまらせ給毎の山よてあふ日陽の久しや
 長江はあかめ(らんちとせ(てい)く松の花はさくやと

藤原 古徳女
 齋藤 敬
 神谷 敬
 高橋 正治
 乙部 真全
 柳橋 真樹
 間瀬 正朝
 坂田 愛敬
 須藤 百年
 朝霧 建敏
 櫻井 武敏
 松井 忠恕
 坂田 吉正
 榎野 當義
 木田 俊成
 倭女

図14

『類題八雲集』について（芦田耕一）

「立秋」の「夏の日のながれく／＼てあづさ川夕波涼し秋やたつらん」（「秋部」）の「あづさ川」は他に知られない名所である。

このように、多寡はあるが、多くの名所が詠まれている。実は歌会で名所歌が生まれることは多いようである。事例を挙げると、『文久二年八百首』に「千竹園為泰ぬしの五十賀に寄出雲国名所祝といふことを」の詞書で、六三首もの歌が見られる（図14）。「千竹園為泰」は松江藩の歌学訓導の森為泰のこと、五〇歳の算賀は万延元年（一八六〇）である。大社でも鶴山と亀山の両社中で、諸国の名所が詠まれる機会がしばしばあったのではないだろうか。お互い切磋琢磨して研鑽に励んだ様を想像する。

資料の引用に際しては、私に句読点や濁点を付した。

『類題八雲集』については、原豊二・山崎真克両氏と『類題八雲集』

―翻刻・解説と作者索引―（非売品）を上梓している。

貴重な資料を提供していただいた関係各位に感謝します。

注

(1) 中澤伸弘氏『徳川時代後期出雲歌壇と國學』所収「出雲歌壇の成立と展開」

(2) (1)に同じ。

(3) (1)に同じ。

(4) 『統和本入門』以下の橋口氏の引用はこれによる。

(5) 『丙辰出雲国三十六歌仙』（小本。丁数は全一二二丁）は五〇部印刷で費用は四五匁であった（中澤氏『徳川時代後期出雲歌壇と國學』所収「富永芳久と出版活動」、芦田耕一・蒲生倫子『出雲国名所歌集―翻刻と解説―』所収「附録二「富永芳久と出雲の名所」」）。

(6) 『和歌俳句歌謡音曲集』（新日本古典文学大系《明治編》）

(7) 『大社町史 中巻』所収「出雲国学と幕末の杵築大社」（中澤氏執筆）に紹介されている。

〔付記〕本稿は、山陰研究センターの二〇〇七―九山陰研究プロジェクト「山陰地域古典文学資料の公開に関するプロジェクト」（研究代表者・芦田耕一）、島根大学二〇〇八・九年度萌芽研究プロジェクト「歴史・文化資源を活かした「地域まるごとミュージアム」化実践プロジェクト」島根大学旧奥谷宿舎を取り巻く「ひと・まち・なりわい」をキーワードにして」（研究代表者・会下和宏）による成果の一部である。

On the "Ruidai Yakumo Shu"

ASHIDA Kouichi

(Faculty of Law and Literature, Shimane University)

[Abstract]

The object of this paper is to give a summary of what is known about the "*Ruidai Yakumo Shu*". It contains the following six points of view.

The first point; There are differences of the name of the book "*Turuyama-Shachu Zouban Shomoku*" in some books. And some books have the name of the book in the inside cover, others do not. The second point; "*Turuyama-Shachu Zouban Shomoku*" contains 1320 tanka poetries and 344 poets. This was a large collection of tanka which contains poems of poets in a district. As well as we know, there is not such a large scale local of collections of tanka. It is not clear where those tankas came from. There is a possibility they came from tanka poets who attended gatherings of tanka poets called "*Turuyama-Shachu*" and "*Kameyama-Shachu*". The third point; This collection of tanka poetry has local area edition or private edition. This is the "*Turuyama-Shachu Zouban*" version and there are some other versions. The fourth point; Scholars have not come up with good answers about the print run; days until they were published, and costs. As well as we know, this collection of tanka has 3 versions. So, it might have be reprinted. The fifth point; This collection was sold by the book stores based in Kyoto, Osaka, Tokyo, and Nagoya, and they have local area editions and private editions. It means that there used to be a huge demand for this collection. The sixth point; This version contains many poets for places of scenic beauty and historic interest. This also shows the possibility that this collection collected poets from a gathering of tanka poets.

Keywords : Izumo-kadan, ruidai-wakasyu, local print, kadan-kessha

